第５回「徳山あすかのロシア生活」



「日露交流、次世代のため」モスクワで日本文化フェスティバル

モスクワの日本ファンにとって毎年恒例となっている日本文化の祭典が、HINODE 文化フェスティバルです。2019 年以後は、コロナ禍などを経て 5 年間中断していましたが、2024 年 11 月に再開しました。その後は昨年、今年と、モスクワ市内の会場で行われ、毎回会場内を移動するのも大変なほど大盛況となっています。今年は 10 月 4 日から 6 日まで 3 日間にわたって行われ、私は初日に参加してきました。平日にも関わらず大勢の人で賑わっていました。



ピーチ姫のコスプレ

HINODE の特徴は、日本の伝統的な文化芸術と、コスプレやポップカルチャー、アニメなど、様々なジャンルの日本を同時に楽しめることだと思います。毎回日本から特別ゲストが来るので、ロシア人参加者たちは日本のアーティストとの触れ合いを楽しみにしています。ちなみに昨年は、元関脇の豊ノ島さんと、元幕内力士・大喜鵬こと山口雅弘さんが来てくれており、「幕内力士の訪問は 60 年ぶり」とロシアメディアが大きく報道していました。

芸者がモスクワ地下鉄に登場

実は HINODE 開幕の数日前、着物姿で現れた 3 人組が、メディアの話題をさらっていました。その正体は舞踊集団・美尾屋（みおのや）の織位さん、みなみさん、ちあきさんです。ロシアの新聞が「芸者がモスクワのメトロに登場」と大々的に報じ、古い建築と装飾が美しいモスクワ地下鉄と、きらびやかな芸者の装いの組み合わせが、読者に強烈な印象を残しました。

初日のステージは、伝統的な舞に加えて、人気アニメ「鬼滅の刃」のテーマソングに合わせた踊りを披露したり、一般参加者と一緒に東京音頭を踊ってみるなど、大いに盛り上がりました。3 日間連続で通う人もいるので、毎日違うプログラムを組んでいます。



美尾屋のステージ

代表の織位さんは、中東にも行ったことがあり、今のロシアの状況下に対する不安はあまりなかったと話し、ロシア行きのオファーをすぐに受け入れたと言います。「ロシア文化にとても興味がありました。実際に来てみたモスクワは、思い描いていた通りでした。ロシア帝国の時代から脈々と続く文化、美しい街並み、芸術が継承されていると感じました。状況が良くなって、時が訪れたら、日本の方に旅行に来てほしいです」と織位さん。

赤の広場やグム百貨店など、少しだけ街を散歩する時間もあったそうです。みなみさんは「ロシアの方々が温かくて。こんなに親日家の方がいるのかと思って、嬉しかったです」と、日本語で何度も話しかけられたことを明かしました。ちあきさんは、ロシア行きの話が出た時、これからの人生で果



美尾屋の皆さん

たしてロシアに行く機会があるだろうか？と考え、こんなチャンスは二度とないと思い、渡航を決意。「ドローン攻撃のニュースもよく報道されているので、イベント自体がキャンセルになってしまうのではという心配はありました。でも私は行きたかった」と話し、イベントが開催できたことに対して、感謝の気持ちを述べてくれました。

筆で世界を平和に、「愛」のプレゼント

書道家でもあり墨絵師でもある HIROKA（裕香）さんは、墨書絵師として HINODE に初参加しました。日本にいるとロシアの状況が全く伝わってこず、ロシアに来た今となってはメディアの報道にも大きな違和感を覚えたそうです。実際、ロシアに来てみて、日本のことを好きでいてくれるロシア人と数多く出会い、日本の報道のイメージと現実ではこんなに温度差があるのかと、申し訳ない気持ちがわいてきた、とのことでした。



墨書絵師 HIROKA さんと、制作途中の作品

HIROKA さんのアート活動のテーマは、筆で世界を平和にすること。そのため、ロシア渡航のオファーがあった時、これは絶対に受けなければならないと思い、即決したそうです。

壇上では、最近モスクワ動物園で鶴の赤ちゃんが産まれたことにちなみ、綿の浴衣に鶴を描きました。「観客の方がこれだけ盛り上げてくれることは日本ではあまりないので、とても嬉しかったです。パフォーマンスが好きなので、機会があればこのようなことをモスクワのストリートでもやってみたいです」と話してくれました。

インタビュー時に隣にあったのは、未完の白鳥の絵。日本の鶴とペアとなるのはロシアの白鳥、ということで、更に描き込んでいき、ロシアの「露」という漢字を入れて完成させるのだそうです。

ロシア人は墨の文化に抵抗がなく、積極的にチャレンジしています。ワークショップでは、HIROKA さんの指導のもと、愛という漢字をハガキと書道用半紙に書いてみました。参加者は愛を込めて書いた作品を大切な人にプレゼントするため、大事そうに持ち帰っていました。

ロシア人のコスプレレベルが高い理由

世界コスプレサミットに、日本代表として出場したのみならず、オーガナイザーとしても関わっている FRAN さんは、コスプレーヤーが集結する HINODE のスター的存在です。



コスプレイヤーFRAN さん

このイベントに欠かせない存在となっているだけに、FRAN さんは「もはや呼ばれなくても来ているような感覚があります」とジョークを言っていました。FRAN さんによれば、コスプレの観点から言うと、ロシア人はとてもクオリティの高い衣装を作るのだそうです。それは私のような素人から見ても、明らかでした。ロシア人とはコスプレという共通の趣味を通して盛り上がれるので、言葉が通じなくても一緒に遊んだり、次のコスプレについて話し合ったりできてしまうほど心が通じている、と話してくれました。

「ロシアって美術館や博物館がたくさんあって、子どもの頃から本物を見る機会が多いですよね。目が肥えているコスプレイヤーが多いんです。今はそれこそオンラインの時代になってしまっていると思うんですけど、そうではなくて、本物を見ているからこそ作れるものがある、そのロシア人のセンスが好きなんです。例えば私は歴史衣装とか、ゴージャスで重いような衣装が好きで、ロシア人の衣装を見て『本物を見ているからこそ作れる衣装だな』と思うことがあります。日本人でも、着物の着方が違ったりすると違和感を覚えますよね。それと似た感覚で、ロシアの人って何か当たり前に持っているというか、培われているものがあるな、と。ロシア人のセンスが、私の好みのセンスなんです。」

FRAN さんは HINODE が終わったらサンクトペテルブル

クへ行き、エルミタージュ美術館で芸術鑑賞する予定とのこと。もう何度も行ってはいますが、エルミタージュの所蔵品を全て見ることはほぼ不可能です。今回も「本物」を求めながら、ロシアの友人との交流を深めたいと話してくれました。



クリスティーナさんと HINODE のマスコットキャラたち

会場を歩いていると、しょっちゅう日本語で話しかけられます。日本語勉強中の人に話しかけられるのは嬉しいものです。日本語スクールに通っているクリスティーナさんは、12 月に東京と大阪に旅行へ行くため、気合いを入れて勉強をしているとのことでした。12 月にはクリスティーナさんの誕生日があるため、2 週間の旅行を夫がプレゼントしてくれるのだそうです。「今回の目的は主にショッピングとグルメで、特に日本の生ビールが一番楽しみです。今回は無理ですが夏には沖縄に泳ぎに行きたいです」と話してくれました。

HINODE 主催者インタビュー

このイベントで特筆すべきは、完全に民間のオーガナイズだということです。会場の予約に始まり、企業のブース出展を呼びかける営業活動も、日本のアーティストへの出演依頼や安全面での説明も、全てを自分たちでこなしてきました。これまで培ったノウハウはありますが、それでも毎年何かしら新しい課題が登場してきます。日露関係の悪化を受けてスポンサー離れが起きる中、これだけのプログラムが詰まったイベントをやるのは容易ではありません。

モスクワでビジネスセンター「ジャパンハウス」等を手がける「サーヴィンスカヤ西洋」取締役の遠藤伊緒里さんは、文化交流は次世代のため、と話してくれました。

「今までもこれからも民間のレベルで文化交流を続けることが大切だと思って、やってきました。今こうして HINODE を開催しているのは、私たちのためでもありますが、何よりも、次世代のため。次世代が成長した時に、日露交流がされていて良かったなと思う人が、日本にもロシアにもいてほしい。そのために、今できることが、文化交流なのです。」

サーヴィンスカヤ西洋のルーツは、セゾングループの創業者だった堤清二氏がソ連時代に作った「モスクワ西洋」です。堤清二氏自身、辻井喬（つじい・たかし）のペンネームで



開幕で挨拶に立つ遠藤伊緒里さん（左）

詩人・小説家としても活動していました。カリスマ経営者は文化人でもあったのです。モスクワ西洋では様々な文化事業や交換留学を行なっており、それが評価されモスクワの一等地に投資する権利を得て、ビジネスセンターの開設につながったという歴史的な経緯があります。そのため、文化事業にかける情熱は会社としての信念でもあるのです。

ロシア人による催しも多数あり、挙げていけばキリがないのですが、一つだけご紹介します。高等経済学院という名門大学の歌舞伎クラブによって、狂言が上演されました。役者たちは、全員ロシア人学生ですが、全てのセリフを日本語で、完璧に暗記して演じています。舞台の上部にはロシア語の字幕がついています。



学生による本格的な狂言

この日の演目は「棒縛（ぼうしばり）」でした。酒好きで、ついつい酒を盗み飲みしてしまう召使い 2 人が、主人に腕を縛られながらも、あの手この手で酒を飲もうと知恵を絞る様子が非常にユーモラスです。酒蔵の酒を盗み飲みするシーンでは、会場が大きな笑いに包まれました。このように日本語が堪能で日本文化に夢中になっている若者たちがいるのはありがたいことで、彼らの活躍の場が少しでも増えるようにと願わずにはいられません。文化交流はまさに次世代のため、という遠藤さんの言葉を、狂言を鑑賞しながら思い出したのでした。

（徳山あすか／モスクワ在住ジャーナリスト）